

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

柳生の秋祭りで演じられるスモウは、十二人衆のうち十一老と十二老の2人が抱き合うようにして2度組み合うものだが、東山中の秋祭りでは、他にもいろいろな相撲が伝わっている。

奈良市邑地町では、40歳以上の男が年長順に毎年12人ずつ秋祭りの渡御衆になり、七、八老が大相撲を、九、十老が小相撲をとる。大相撲の力士は左肩に麻布を担いで登場する。白足袋にまわし姿で互いに右手を取って、床を踏みしめながら右に3回まわることを3度繰り返す。

大柳生では、敬神講のなかの二十人衆のうち、

十九老と二十老が向い合いで前進後退してから互いに両手を相手の肩に置いて組み合い、上半身を左右に傾け、尻を3度たたく。

丹生では、渡御者7人のうちの笛役3人がスマウをとる。3人のうち年長者が行司役になり、衣装のまま舞台で実際に四つに組んでスマウを取るが、ここでは年少者が負ることになつている。



秋祭り彩る神事相撲

宝の太刀を左肩に担いで神前に進み、前方の案に一旦置いてから右耳に挟んでいた小さな紙切れを前に置く。これを繰り返した後、素襪の上からダラケフンドシを着け、額にボウシと呼ぶ紙を巻き付けた2人が、向き合つて相手の肩に両手を置いて、その場で左回りに3回跳んで、次に2回逆に跳んで元に戻る。

各地の秋祭りの相撲の所作は変化に富んでいるが、富座ないしその変化した組織の一員が務める

各地の秋祭りの相撲の所作は変化に富んでいるが、富座ないしその変化した組織の一員が務める

的神事相撲として毎年行われているのが特色である。それを富座の長老が担っていることも、神前での相撲が重要な意味を持つていたことが分かる。

こうした相撲は、春日若宮おん祭りでかつて行っていた相撲と深い関係があると思われる。江戸時代中ごろの『春日大宮若宮御祭礼図』をみると、狭川の耳に挟んだ紙片は相撲の数を数える「数指」で、邑地の大相撲が肩に置く麻布は、力士に与えられる「褒美布」であることが分かる。

(奈良民俗文化研究所代表)